

詩誌
極微

vol.1 家

TAKE
FREE

眠れない夜、
私がよく思
い浮かべる
いくつかの
部屋の中で

詩誌 極微
vol.1

家

窓

屋上

浴室

子供部屋

茶の間

戸口

戸口

我が家の戸口には

真ん中に一本

しつかりした柱が通っていて

招き入れるにも追い出すにも

すこぶる向いていない

手を繋いでいた親子は

手を離して左右から入る

太った人には遠慮してもらい

太らせてしまった人は

責任を持って養い続ける

我が家にあがってくるために

または出ていくために

別々になったり

痩せてみたり

来客は徐々に

均一の質になり

太らせないために

食卓も質素になり

疲れることがなくなった

ときおり

戸口の柱を背に

往來を眺める

無関心に通り過ぎる人を

寂しく見送っていると

柱が背中に

もたれかかってくる

茶の間

はるなつあきふゆの

畳の上

いつも向こう側の茶の間であつたから

お茶こぼして生きていた

台無しにするような気持ちよさのなかで

用事を思い出したり

人間みたいなこと言った

たまたま寝ることもある

ブラウン管

ブラウン管

と

頭のなかで唱えたり

あるいは

プー太郎だった

さすが茶の間

米粒の着想

誰にも悟られずに

こびり付いて

力道山は強かった

そんなに古くはなかったか

茶の間に滑り込んだとき

勝敗は決まっていた

川の字で

茶の間に眠る

そんな頃がきみにもありましようか

あのころ春だったね

子供部屋

その五分間、きみの部屋は夕方のひかりに浸される。

くせの残る髪のまま、きみはベッドに寝ころんでいる。「——通りの向こう側には、あなたの家があった。」黄ばんだ地図を広げて、バスの窓にかさねる。

なだれこむ夕日のなかで、あの日のきみは、緑色の受話器を
まるで、死んだハムスターみたいに頬に押し当てている。

「ニュースでね、こどもを置いてでていった母親のことをやってた。」古い町を透かすひかりが
きみの肌をまだらに照らす。きみに、そばかすがあった、あの「こどもたちはね、

みんな餓死するの。みんな腐って、口の中に虫がわいて——」
十六歳の夏。きみのママは消える。

「あなたのことが、ずっと好きだった。」きみのスカートが

ベッドのうえて平たく広がる。膝がうごくたび、きらめく埃が舞い上がる。「あの日からずっと——。結婚しても、
子供がうまれても、……」出されそびれたその手紙を、きみはベッドの下に隠す。

(いっしょに来てほしいの)

きみのママは、「……あなただけを愛していた。」ある晴れた朝

五十歳の人生を終える。

(あのひとのお葬式に。) 十六歳の夏

ぼくらは一度だけキスをした。それからきみは町を出て、結婚して

「隣の家が更地になっちゃって」バスの窓を開けると、

かすかに海のおいがした。「洗濯物は、砂だらけ。」——ずっとここで生きていくんだ、と

きみは九月の日差しをなかで思う。「夢でね、

あの家の、あの部屋のことを思い出すの。」火葬場のよこを過ぎて、

テトラポットの向こうに、海が見えた。——きみが

この町を離れる前の日

きみと、きみのパパと、ぼくたち一家だけで催された小さなパーティー。夕方になって、

ふたりできみの部屋へ行く。きみの窓からは、十六歳の

ぼくらの町が見える。

「——ちっちゃい町だね。」

きみは、目に焼き付けるように暮れていく町を眺めている。

「公園には、バスケットのゴールがあった。」

「…うん。」

「真夜中にふたりで空気のぬけたボールを奪い合った。」

「そしたら、」

警察官が来て」

「ふたりは全速力で逃げていく。」

「息が白い。」

「そう、冬だった。」

「きみは黄色のマフラーをしてる」

「あなたの家は改装中で、ネズミ色の薄い幕が、内側からの明かりに透けている。」

「母親が不安になって、きみの家に電話をかける。」

緑色の電話が鳴る。

「ママは——」この町から

すぐ近くの町に住んでいたんだってさ。

「ママは、桜の木の下で、私を抱いている。」

「首がまだすわってない」

「この通りの向こうに、中学校がある。」

「ぼくらの机は、一ヶ月だけとなりどうしだった。」

「窓際の席は、海のおいがした。」

「教科書を見せてくれた。」

「二年生の数学」

「ぬれてベコベコの表紙」

「ふたりで、ずぶぬれて自転車をこいだ。」

「それから、きみの家で、きみのママが焼いてくれたパンを食べた。」

「だから、水曜日」

「夕日がすごかった。」

「夜になるまで、ずっとふたりでいた。」暗いガラスの内側で

十六歳のぼくたちは、町の地図の、端と端をにぎりしめて、なだれるようにベッドに倒れこむ。めくれたT
シャツから、

白い背中がのぞく。

「向こうに着いたら、電話するね。」

「——うん。」

それから十年後、ぼくらは海辺のホテルで別々の一夜を過ごす。次の朝がきて、きみのママの葬儀に出て、そうして、二度と出会わない。

浴室

いつも首までしっかり浸かって
十を数えてましたから
化けてでるからいいよ
なんて声も普遍的でした

ひと昔前の
タイルの裏側には
沢蟹が住んでた

泡のように消えたのに
わたくしは
まだ浸かっている

あらゆるポンプから
溢れる喻えかな

三ツツシユの孤独が
胸を打ったところで

次の

問いかけがやってくる

どこから洗いますか

俺

首からなんだ

振り返ったって

誰もいやしないけど

ここは

坂を下って直ぐの

あの池に

つながっている気がする

屋上

土曜日の朝

屋上で寝をべっている

太陽よりも気になるのが

コンクリートの床の

焼けるような熱さだ

この家はいつも発熱していて

壁という壁が熱い

表札も郵便受けも

ドアノブもインターホンも

いつの間にか溶け落ちてしまった

ここは家だとわからない

こちらから求めたものさえ

いつからか届かなくなり

休日には誰とも会えなくなった

だからこうして土曜日に

屋上で背中を焼いているのは

単なる趣味ではない

朝から徐々に溶け出して

四方八方にどろりと広がり

夕方やっ

雨どいを伝い

流れ出る

窓

あなたのアパートの窓をあけると、ふくらんだ風が白い部屋の壁紙をさわって吹き抜ける。
あたらしいベッド。

本棚。

一度だけ使った台所。

もう

白くない息。

バスの最後尾の座席と、

少しの雨。

「この雨なら、大丈夫。」

あなたの（大丈夫）。

街の

カリフラワーみたいな白。ふりむくとき、

いっぽんずつになる髪。

道の

向こうの花。

その、かさなって透ける花びらよりも、ずっと大きな鳥のことも。

『花にとっての

鳥の高さ。』（……くせのある字。）

はじめて買ったスポンジ。

はじめて買った掃除機。

窓辺。

おおきな鏡のなかで、服のひだまであなたになる。あなたのままで

鏡のそとへ出る。

「茶の間」「浴室」 佐野 豊 (さの・ゆたか)

「子供部屋」「窓」 篠田翔平 (しのだ・しょうへい)

「戸口」「屋上」 森田 直 (もりた・なお)

編集後記

兼ねてから詩の仲間が欲しかった。生きていて詩を書いていくことと、詩の仲間となにかを作ることは、普通のことかもしれないし、普通じゃないことかもしれない。極微は、はじめた。同人の三人は、詩人・松下育男さんによる詩の教室「buoyの会」の参加者として知り合った者同士である。未長く見届けて頂けたら嬉しく思います。次号もご期待下さい。最後に、生涯を通じて多くの家々を描いた画家の、こんな言葉を紹介して。「人びとの家の奥深くに魂がある」(モーリス・ユトリロ)。
(佐野)

し し きょくび 詩誌 極微 vol.1 「家」

発行人——佐野 豊

発行所——佐野書房

発行日——2018年12月15日

ご意見・ご感想の募集

ご意見・ご感想をお待ちしております。三人にとって、何よりの励みになります。

メールアドレスは以下の通りです。

shishi.kyokubi@gmail.com

表紙の文

Marcel Proust(1913). À la recherche du temps perdu.

マルセル・プルースト 鈴木道彦=訳 (2006).

失われた時を求めて 2 第一篇スワン家の方へⅡ 集英社 より引用